

通信教育部メディアスクーリング
経済学（2017年度撮影）

経済学

（資本と利子から経済を考える）

第11回

法政大学 法学部

水野和夫

第11回目のテーマ

- ▶ 資本、資本家、資本主義
- ▶ 資本と利子の誕生 . . . 13世紀初め
- ▶ 私的所有権 . . . 13世紀末には定着

▶〈資本、資本家、資本主義のどれが重要な概念か？〉

- ▶ マルクスにとっては、企業家あるいは資本家はたんに資本に操られ、踊らされている**操り人形**にすぎない。
- ▶ 資本家は一見自らの意思で、自らの価値判断にもとづいて行動しているように見えながら、じつは資本の意図を実現してゆく一つの人格的存在にすぎない。³

資本、資本家、資本主義

〈資本の誕生の経緯とその意味の変遷〉

- ▶ 利息と高利貸しがいがわしい行為ではない
- ▶ 12-13世紀に誕生・・・1211年に存在が確認
- ▶ 1283年には、商会の資本・・・後に近代の特徴となる諸要素がすでにイタリアにおいてその兆しを見せていた
- ▶ 18世紀・・・前貸し＝投資
- ▶ 遊休資本と活動資本を区別→もうひと押し

マルクスの考えた「資本」の本質

マルクスの階級概念(p.41)、『経済学の考え方』(宇沢弘文、岩波新書、1989)

アダム・スミスの考えた三大階級の利害調整

アダム・スミスは、地主、資本家、労働者という三大階級の概念にもとづいて議論を進めていったが、この基礎にあるのはあくまで啓蒙された市民であり、自然価格のもとで、これらの三つの階級の利害は調和されていた。

マルクス、階級の矛盾

マルクスは(略)資本家階級と労働者階級の矛盾、対立こそ、資本主義制度を特徴づけるもっとも顕著な現象であると考えた。

スミスVS.マルクス

スミスにとっては、近代的意識に目覚めた市民が、企業家として経済活動の担い手であったが、マルクスにとっては、企業家あるいは資本家はたんに資本に操られ、踊らされている操り人形にすぎない。

資本の本質

資本はときとしては貨幣に、あるいは生産資本、流通資本に姿を変えて現れるが、資本としての本質は常に維持されつづける。

資本の神秘性 ・ ・ ・ 資本家は資本の操り人形

マルクスの「資本」(p.41)

神秘的概念
G—W—G'

マルクスの資本は一種神秘的な概念である。
マルクスの資本は、資本主義経済の深層にあって、その生産関係を規定して、貨幣資本→生産資本→商品資本→貨幣資本という形をとって、絶えず循環しつづける。

資本、資本家

資本が人格的に表現されたものが資本家であって、資本家は一見自らの意思で、自らの価値判断にもとづいて行動しているようにみえながら、じつは資本の意図を実現してゆく一つの人格的存在にすぎない。

資本と不可
分な資本主
義(p.42)

資本はまた、その意図と目的がもつとも効果的に実現できるように資本主義制度そのものを変えてゆく。
資本主義という制度自体もじつは、この資本と不可分には考えられない。

蓄積

資本の目的はなにか。それは蓄積することである。

資本主義経済の本質・・・労働力の徹底した商品化

労働力の搾取	したがってできるだけ大きな利潤を追求しようとするのが資本の本性であって、そのためには <u>労働力の搾取</u> がもっとも効果的な手段となってくる。
利潤の極大化	<p>資本は労働力を最大限に搾取することによって、最大の利潤を獲得して、蓄積せよという至上命題に応えることができる。</p> <p>このとき、労働力をどこまで搾取することができるかということは、<u>労働の再生産という経済的な要請によって決まってきて、そのために必要な社会的、政治的な条件が逆に規定されてゆく</u>というのがマルクスの主張するところでもあった。</p>
プロレタリアート 資本主義の本質（労働力の商品化）	<p>マルクスの労働者は、産業革命以後の機械制大工場のなかで働く、プロレタリアートとしての労働者であった。</p> <p>労働者が自らの<u>労働力を商品として売るより他に</u>、生活の術をもたないという点に、<u>資本主義経済の本質</u>があり、労働者は、自らの労働力が生み出したものよりはるかに少ない価値しか、賃金として得られない。</p>

13世紀、利子公認の背景

禁止	西暦300年ころ	聖職者に対してウスラ禁止(『中世の高利貸、p.20)		
	789年、カール大帝	聖職者ならびに一般信徒に対してウスラを禁止(前掲書、p.21)	経済・社会(貨幣経済化)	
	1179年(第3回ラテラノ公会議)一部容認	この「会議で問題になったのは、 <u>《明白な》高利、つまり《不正な利率での貸し付けだけで、だからもはや全面的な利息の禁止はなくなった》</u> (アタリ『所有の歴史』、p.230)	『中世の産業革命』(ギャンベル)	「近代工業時代の鍵となる機械は蒸気機関ではなくて 時計 である。」(p.168) 「機械時計の発明は1277年と1300年の間である」(p.172)
容認	1215年(第4回ラテラノ公会議)全面譲歩	「利子が { 支払の遅延に対する代償 両替商や会計系の労働に対する賃金 貸し付け資本の損失リスクの代価 とみなされるときには、 <u>貨幣貸付に報酬がなされてもよい、といささか偽善的に容認する</u> 」(アタリ『所有の歴史』、p.230-231)。	『中世の高利貸』(ル・ゴッフ)	「 煉獄のお蔭 で地獄を免れうるという希望は、高利貸が13世紀の経済と社会を資本主義に向かって前進せしめることを可能にする」(p.118) 「農業技術は進歩し、収穫量も増大した。 機械 (有輪・撥土板付き犁・織機・製粉機)、…技術(耕転術、…算術の出現—1200年頃、正真正銘の偏狭的計算癖を生み出す)、こうしたことは、… ある種の成長 として感じ取られてはいた。」
全面容認	1517年(第5回ラテラノ公会議)	「利子を取る貸し金を認める」	『所有の歴史』(アタリ)	「封建制との妥協から資本主義への妥協へ」移行することで、教会は、資本主義のなかで自己を救おうとしただけにすぎない。」(p.229)

13世紀になぜ金利が認められたのか？

『物質文明・経済・資本主義 15-18世紀 II-2交換の働き2』（F・ブローデル、原著1979、山本淳一訳、1988、みすず書房）

文明はつねに否とは言わない（p.342）

11世紀、活力が蘇る

諸文明あるいは諸文化—（略）—は膨大な量の週刊・拘束・受容・勧告・断定の集積であり、我々一人一人の内において個人的で自発的なもののように見えるが、実はしばしばきわめて遠くからわれわれのもとにやって来る現実の総和である。

ヨーロッパにおいて、**11世紀とともに活力が蘇るとき**、市場経済や手の込んだ金銭操作は、それぞれ「ひんしゅくを買う」発明であった。老人である文明は、原則として革新に対して敵対的である。それは、したがって、市（いち）に対して否と言ひ、資本に対して否と言ひ、利潤に対して否と言うであろう。

信用の連鎖

キリスト教世界と商業—高利貸しをめぐる論争（p.348）

利息を伴う貸付けは相手を問わず禁止される。それが、聖ヒエロニムス（340-420）が説くところである。

彼の同時代人ミラノの聖アンブロシウス（340-397）は、しかしながら、正義の戦いの場合に敵に対して利息をとる貸付けを容認する。こうすることで、彼はイスラム世界との交換における利息を伴う貸付—後世、十字軍の際に問題となる—に前もって門戸を開いておいた形なのである。

（p.351）

信用は、暦のめぐりの運不運、それが惜しげもなく振る舞う災厄、待機という危険にさらされる古代農業経済にとって一つの必然である。種を蒔くために耕し、収穫するために蒔き、そして連鎖は再び始まるのである。

利息の受け取り＝時間の売買

貨幣経済の急速
化

回転するために十分の金銀貨をけっして持ったことのない貨幣経済の急速化とともに、「唾棄すべき」高利貸しに白日の下で行動する権利が認められることは避けられないことであった。

利息を受け取る
＝時間を売る

貸付け—mutuum—が利益をもたらすときはすべて高利貸しなのである。高利貸しでない唯一の貸付けは、貸し主が〔何物をも期待することなく貸し与えよ〕という教えにしたがって、定められた日付に前貸しした金額の返済を受け取る以外には何も期待しないものである。

さもないと、**それは金銭が譲り渡されていた間の時間を売る**ことになる。ところが、時間は神のみに属するものである。

家屋が家賃を生むこと、畑が収穫と賦課租を生み出すこと、それはよい。しかし、不毛の金銭は不毛のままにとどまらねばならぬ。

一つの突破口

一つの突破口
(p.352)

為替手形

銀行預金への
付利も合法

しかし、スコラ哲学の思想は一つの突破口を開いた。

利息は、貸し主にとってリスクがあるとき、あるいは儲けを逃すことになる場合には合法的となる。

これらの特例は多くの門を開くのである。たとえば、cambiumすなわち為替は金銭の移送であるので、それを具体的な形で表す**為替手形**は市場から市場へとがめられることなく動くことができる。

なぜなら、それに通常付随している利潤は前もって保障されているのではなく、リスクを伴うからである。

教会が違法としていた銀行家への預け金さえ合法的になるであろう。

経済活動が急速にふたたび動き出そうとする時期に、金銭が果実を生むのを禁じるのは一つの賭けであっただろうから。